

学習形態 Zoom での講義

テーマ 『教行信証』とは何か。

— 『教行信証』撰述の意図 —

第二部

『化身土巻』に学ぶ（8）

今回は Zoom のリモートでお話をさせていただきました。いわゆる「三願転入」の所の課題はいろんな方向から見れば、色々出てきますので、興味深いところでもあります。真宗教学的な課題ばかりではなく、信仰の歩みそのものにおいても、考えさせられてくるところを、実感したことでした。「三願転入」論についてはまだまだ議論していきたいところでしたが、今回は、その次、「信に知りぬ、聖道の諸経は・・・」から始めていきたいと思えます。

この文はご存知の「後序」の文頭に相応している文章になっております。具体的に言えば、「聖道の諸教」と「浄土真宗」ですね。その表現は違えども、内容は「後序」と同じことを述べています。そういたしますと、ここの一節は、どう考えればいいのか、どう見ればいいのか、戸惑うところでもあります。

「後序」では「竊かに以見れば」ですが、ここでは「信に知りぬ」です。これは前の文章をうけての内容です。「後序」の方は、「前を受けて」というよりも「あらためてじっくり考えてみれば」というような、切り出しの言葉ですね。完全に節をかえて始まる文章です。そういう違いも気にしながら読んでいきたいと思えます。

まず、この「信に知りぬ」ですが、親鸞は「まことに」の字をいろいろ使い分けておられます。それを拾い上げてみますと、「(p190) 良に知りぬ」、「(p234) 真に知りぬ」、「(p235) 信に知りぬ」、「(p251) 誠に知りぬ」、「(p298) 誠に知りぬ」、「(p355) 真に知りぬ」、「(p357) 信に知りぬ」というように、「良」「真」「信」「誠」と四つの字を使い分けておられます。これも気にしておく必要があるかと思えます。というのは、前のいわゆる「三願転入」の一節は一応結ばれていますよね。それで、その次の、この一節がどこから、何故出てきたのか、なかなか理解できにくいんです。そのために「信に知りぬ」を理解する必要があるのではないかと思うわけです。

という事は、この三願転入の論は、本願の三願が転入していく論理だけではなく、聖道門から浄土門への転入を暗示している、と見ることができるのではないか、ということです。もっと具体的に言えば、時代遍歴の中で、仏道も効力を失い転入せざるを得ない事情を示そうとしていると読み取ることができるのではないか。そういう「確信に触れた」ということではないかと思えます、それが「信に」だと。

それに対して「真に」は「確実性」を意味していると考えます。そのほかのものはうまく表現ができません。皆さんどうでしょうか。まあ、その場に来たら考えたいと思えます。

それと、前回の座談で出てきたんですけど、『観経』の「是旃陀羅」の問題ですね。これは次の節の話になりますが、そこに「諸経の起説五種に過ぎず」とあります。そしてこの『観経』も大聖の自説だと述べられています。そうしますと、「是旃陀羅」を述べている『観経』はいったいどうなのか、という問題も起こってくるわけです。（これについては後に述べます）

ともかく、仏説であっても、聖道門と浄土門の相違を見極めながら、いろんな所説を分析とするのが、次の「五説」の論になってくるわけです。そういう事も念頭に置きながら、次の「諸経の起説」を読んでいきたいと思えます。

課題47 「諸経の起説」を考える

まず、「信に知りぬ」ですが、この「信に」は「言葉・言辞などが違わない」という意味でつかわれるようです。そういたしますと、この前の文章「至徳報謝せんがために、真宗の簡要を撫うて、恒常に不可思議の徳海を称念す」という言葉をうけて、「その通りだ」と頷いて「聖道の諸教は・・・」と展開していかれるのでしょう。

それで、この浄土真宗は濁世の群萌を悲引する、というその根拠を述べようとされているのが、この「諸経の起説」であろうと思われます。それはなぜか、というと、前回の「三願転入」にあるわけです。「三願転入」は20願から18願へ「落在（これは清沢満之師の言葉。これがぴったり。）」するということですから、「果遂」から「唯除」への落在です。

【清沢満之師の「絶対他力の大道」という論文の第一に「自己とは他なし、絶対無限の妙用に乗託して任運に法爾に、この現前の境遇に落在せるもの、すなわちこれなり」という言葉があります。】

それはどういうことか、と申しますと、『信巻』の「難治の機」へと戻っていく（落在していく）、という事であります。（p251）。「難治の機」とは、五逆・謗法、そして一闡提ですね。「唯除」ではその二つが述べられています。

この三つは「ことごとく、声聞・縁覚・菩薩のよく治するところにあらず（p251-下2）」という事です。これはその前に「九十五種みな世を汚す、仏の一道独り清閑なり」ということを受けて展開してくる内容ですね。この言葉も「五種の起説」と同意でしょう。

そしてp272に行きますと、「唯除」が取り上げられ、ここで『大経』、『観経』、『涅槃経』の相違が取り上げられています。これは「難治の機（唯除）」の具体例を挙げられ、親鸞聖人は『経』自体を「これらの真教、いかんが思量せんや」と、問われていくわけです。

それはどういうことかと申しますと、『大経』で「唯除」が取り上げられ、『観経』『涅槃経』で具体的な（歴史的）現実の中で難治の三機（唯除）を取り上げてきます。そして、仏説だけではなく、六師外道の説や提婆の説などが取り上げられているわけです。『信巻』では、仏以外の説を取りざたはしていませんが、『化身土』のここで仏説とその他の説を分けて見極めなければならないことを、示されてくるわけです。因みに言えば、『観経』の王舎城の内容と『涅槃経』のそれと食い違う部分もあるわけです。それが、『化身土巻』における「諸経の起説」の論議になってきているわけです。

（一）『観経』における「起説」を探る

ここで『観経』において、「説く人」を丁寧にみてみたいと思います。

p121-10「この語を説きたもう時に・・・仏の所説を聞きて」とありまして、その後p122-13「仏この語を説きたもうに・・・仏の所説を聞きて」とあります。どちらも「この語を説く」とありますが、それでは、その仏の語というのはどこからどこまでか、と申しますと、広く言えばp92-5「仏、王宮に没して出でたまう」から先ほどまでの事ですね。（語という言葉も気になるのですが）

次に、p123-1「その時に阿難、広く大衆のために上のごときの事を説く」とあります。この「上のごときの事」とはどれを指しているのか。それは言うまでもなくp89からずっと、最後まで「出来事」を説いているわけです。ですから「是旃陀羅」の文言を含めたストーリーを阿難が人々に説いているわけです。

ところが、その「是旃陀羅」という言葉を出してくるのは月光大臣です。月光大臣は『毘陀論経』の説を根拠に「旃陀羅」を出して戒めるわけですね。そういたしますと、「起説」でいいますと、1つは『毘陀論経』の起説。2つ目は知識豊富な月光大臣の起説。3つ目は阿難の「そういう出来事があった」という起説。

そしてここでは、まだ釈迦が登場しておられないので、仏の起説にはならないわけです。釈迦が登場してからが仏の起説になるわけですね。そういたしますと、釈迦の説法を入れると四つの起説がこの『観経』にはでてくるわけです。

『観経』では、王舎城の出来事の内でのそれだけの内容しか述べられていませんけど、『涅槃経』にはもっと事細かく述べられています。親鸞は、『涅槃経』を持ち出して、何を明らかにしようと考えられたのでしょうか。一つは事実というのは、見る視点によって食い違うということ。それと、六師外道というような多種の説が取り上げられている事などですかね。『信巻』の裏表紙の「悉知義の文」がありますが、それは親鸞聖人にとっては単なるメモ書きではなく、親鸞時代の社会状況も含めて王舎城の事柄が、おおきな課題を見いだしておられたのではないかと私は思っています。しかしながら、この『信巻』では結核がないのも、また意味深なところですね。

したがって、ここで明らかにされてきたことは、『観経』という仏教の経典の中に仏説のほかにも他の起説も記載されているという事を示しているわけです。そういう意味では、この『観経』は大きな意味を持っているのです。

参考までに『毘陀論経』について述べておきます。これはバラモン教の経典です。これは四姓制度を保つための規則だったり行為だったりの内容を述べているものです。『百論疏』によると4つを基本として成り立っており、一つは「解脱の法」二つ目は「善道の法」三つめは「欲塵（婚嫁欲楽）の法」四つ目は「呪術算数の法」となっているようです。この三番目と関連してくるわけですが、『摩奴法典』第十章に「首陀羅の男と、吠舎、王族、婆羅門の女とに依りて生まれたる雑混種は、最下級の人間たる旃陀羅なり」と述べられている。

これは四姓を保つために同じカーストとしか交われない制度に他ならない。そしてそれをやぶることの恐ろしさを「旃陀羅」種を作ることによって見せしめにしてしていると考えられる。しかも、女性がどんな身分であっても、身分の最下位の男性と交わった子供はアウトカーストになる、という事は女性の身分は全く意味がないことになり、これは女性差別でもある。

また、『摩登伽経』という仏典の第一「度性女品」に

「旃陀羅種たる摩登伽女が阿難をみて染著の心を生じ、呪をもつて誘惑し、後遂に仏の教誡に依りて懺悔帰佛せし事」を述べている

また、『同』第三「示真實品」には「四姓平等の由来」を説いている。これは総じて「婆羅門、旃陀羅等に何らの別もあるべからず」を説いている。

インドの歴史を端的に言ってしまうと、カーストにおけるバラモン教と仏教の戦いであった。のち、仏教が追い出され、バラモン教がヒンズー教となってインドを支配していった、という事になる。

最近、宗門内外で「是旃陀羅」の問題が、取り上げられておりますが、当時、インドではカーストを説くバラモン教と四姓平等を説く仏教との戦いであったことを忘れてはいけません。その一場面である王舎城の出来事を読みほどこいかなければなりません。仏教を信仰する頻婆娑羅王と韋提希。バラモンの民間信仰を持っている、お城の人々。また提婆達多の宗教。そういうものが入り混じっての出来事なのでしょう。よく読み解かないと、ただ、『観経』から「是旃陀羅」と消すだけでは、王舎城の問題が変わってしまいます。この辺も皆さんからご意見を頂戴したいところです。

(二) 世の「説人」について

そういうわけで、この『化身土巻』において「説人」の違いは重要であることを、示しているわけですね。ここで述べようとしているのは、いわゆる仏教の経典以外にも「説人」について言えば、五種に尽きるというわけです。そしてその後に「この三経は大聖の自説なり」と述べられていますね。この三経は何か。p 272の所からの流れで見ますと『大経』、『観経』、『涅槃経』とも考えられますが、今ここでは、『教行信証』全体を受けて言われていると思いますので、『大経』『観経』『阿弥陀経』だろうとも考えられます。

それで、『観経』は他の外教も含めながらも「大聖の自説」と言われるわけですが、そうならば仏典の中にも他起説があるように、仏典の外にも五種の「説人」がいる、という事を述べようとしているのではないかと想像するのであります。(端的に言えば、仏典以外の書物の中にも仏法が語られているという事です。)

まず、第一が仏説です。そして聖弟子説。これはただの弟子ではないので仏弟子を意味するのではないかと考えられます。そして第三が天仙説。天仙という言葉は仙人の最高峰を天仙と言われるみたいですけど、私は天人と仙人を合わせた、人間を超えた能力を持つ人々を指していると考えています。言ってみれば、現代では、天人とは優れた学者さんなどですかね。あるいは超人的なスポーツ選手は仙人でしょう。こういう人の発言は素晴らしい内容に感銘したりします。それが天仙説だと思います。無茶ですかね。

そして、第四は、鬼神説。宗祖の『和讃』に出てきますね。「天神地祇はことごとく 善鬼神となづけたり」とありますね。宗祖はこの鬼神を善鬼神と悪鬼神とに分けて考えられておりますね。これらは、天と地、大自然の事でしょう。大自然に起こる恵みと災い、あるいは私たちの生活の中で起こる、ラッキーなこととアンラッキーな事柄ですね。皆さん方、笑うでしょうけど、私達の生活そのものは、この鬼神たちに左右されて生活を送っているのではないのでしょうか。

次に第五に変化説ですが、これがよくわからんのです。

(三) 五種の「起説」の内、「変化説」とは何を意味するのか。

ここの五種の内、四種はそれぞれその主人はわかるわけですが、この「変化説」においては誰の事か理解できません。でも、起説ですから、説を起こす者がいるわけですから。それを少し考えてみたいと思います。

さて、その説を起こす者、それが「変化」であるという事ですね。「変化」という事は、ある意味では「変幻自在」という意味を持っているわけです。そうすると、それが人間だとすれば、変化という事はいろんな人が誰となく、その起源も分からないままに説いていることを意味しているのではないかと思えるのです。

そうしますと、ここでいえば、『毘陀論経』ということになるわけです。これは、インドのアーリア人に流れている思想ですから、アーリア人の共通認識であって、起説人は見えてこないわけですね。ですから「変化説」ということになるのではないのでしょうか。日本でいえば、神道でしょうか。生活におけるしきたりなどもそうでしょうかね。それから、オカルトなどもそうでしょう。悪霊、統一教会でいう所のサタンなどもそうです。誰が説いたかわからないままに、実しやかに言いふらされ信じてしまうわけです。

実はこれが重大な問題なんです。「統一教会」の問題をマスコミ報道等が取り上げて、よく「信仰の自由」などと言いますが、その信仰とはすべて「説人」のいる者だけを宗教とみなして、この「変化説」は宗教と見なしていない感があります。しかしながらその変化説が私たちを操っていることに全く気が付いていないのです。

それからもう一つ気になることがあります。それは「マインドコントロール」という事です。以前仏陀の布教の話をしましたが、釈尊は布教する気はなかった。インドの当時は、六師外道と言われるように、いろんな思想家がいたのでしょう。それと、バラモン教、ジャイナ教などの宗教もあったわけです。そういう中で、釈尊の思想は何だったのでしょうか。その内容ではなく、当時のインド社会の中でどういう立場を取っていたのか、ですね。

そういたしますと、釈尊の思想は、「覚り」ですね。それは、言い換えますと、いろんな思想の呪縛から解放されることである、ともいえるわけです。例を上げれば、前述のように、当時インド社会に蔓延していた婆羅門思想のカーストに対して、その考えから解放するという意味をもっていたのです。という事は、釈迦の布教というのは、思想を与えるというより、自我の呪縛からの解放であり、そのことが「無我の境地」として伝えられていったのではないかと思うわけです。

その「自我の呪縛」とは何か。この「自我」というのは、言うなれば、「自己確信」でしょう。自分で「間違いない」と思っているという事です。それが「マインドコントロール」という事でしょう。統一教会の霊感やサタンなどは、はたから見れば笑える話ですけど、本人は確信を持っている、という事です。そういう人に別の考えを言っても（押し付けても）効果がない、ますますかたくなになっていくという事になるわけですね。これは、統一教会だけではなく、実は我々の姿そのものなのではないでしょうか。

前回、「法存の独り言」で申しました大乘仏教の「利他」の問題、もっと言えば、真宗の教化の問題。こ

ういうカルト集団の布教とどう違うのか。どっかでしっかり検討していかなければならないと思っています。
それでは、次に行きたいと思います。

課題48 「四依」を考える

先の「説人」の所で、「しかれば四種の所説は信用に足らず」と言い、大事なものは「大聖の自説なり」と言われております。しかしここで、たとえ大聖の自説であっても、正しく読み取らなければならない、というわけですね。それは、「四依」四つの依りどころ、によって法を修しなさい、というわけです。(P358-7)

それでは、「四依」とは何か。釈迦が涅槃の時、「自灯明法灯明」が説かれたとするのが有名ですが、これは自分の行の在り方(四念処)のことで、ここでいう「四依」とは異なります。ここでは『智度論』を用いて述べられていきますが、この「四依」が説かれた現場を見てみますと、「自灯明法灯明」は阿難の疑問について説かれた言葉ですね。この「四依」については(p357-下4)「もろもろの比丘に語りたまわく」という違いがあることも注意しておく必要があるかもしれません。

それで文頭に、「今日より」という言葉から始まります。ということは「私(釈尊)がいる間は私を依り処にしても、これから(今日から)は私を依り処してはならない」というのが第一の意味ではないのか。これは「自灯明法灯明」と同じ意味でしょうけど、自分自ら法を学ぶにしても、その学び方を次の三つで示しているようです。

第二の「義に依る」とは法に対する見方読み方なのでしょう。

第三の「智に依る」とは世間に対する態度の在り方でしょう。私たちの文明などを見てみると、楽を求め楽を実現してきた文明に他ならないでしょ。私たちは善悪を無視しているわけではないのですが、善と悪は何か、よくわからないのが現実です。たいていは人に楽を与えるのが善、苦を与えるのが悪、という所で判断しているのではないのでしょうか。そして地球温暖化になったわけです。私達、善悪を正しく量り分別することがいかに難しいか、今もって平然に侵略戦争をしているわけです。

第四は、私はこれが一番大切なことだと感じているのですが、私達の生きる指針だと思います。いわゆる「帰依三宝」ですね。ところが、釈迦牟尼仏が入滅されてしまったら三帰依が成り立たなくなってしまうわけです。末法とは無仏の世ですから。それは「見仏の善根がないからだ」というわけですね。裏を返せば、「仏はまします」ということになります。皆さんはこの第四をどう読まれますか？

ここからは、**私の私見**なんですけど、「私たちの中に大勢の智人がいます。その中に仏がまします。また、たくさんの諸経の書があります。その中に仏法が説かれている書があります。また私たちの中に、比丘僧がいらっしゃいます。しかし私達には、それが見抜くことができないでいるだけである。」という事ではないのでしょうか。

今回はここまでしておきましょう。